

人を惹きつける表現を優先させた将来ビジョン「景観絵本」の策定とその実現への試行 —行政計画に位置づけられない八王子市中心市街地将来像の実現に向けた緑化と修景実験—

正会員 ○千葉優美子* 正会員 和田拓将*
同上 川原晋** 同上 赤羽祐哉***

フロートビジョン 緑化 修景
花街 社会実験

1 研究背景と目的

近年、行政が地域の計画を策定しても自動的に予算と民間投資がついてなくなっている現状を鑑みると、良い民間事業者の参画や投資を呼び込める計画策定とその実現手法が、地域づくりの成否を分けることも多くある。

従来の行政計画は「フォアキャスト型」、つまり「地域の現状や過去のデータを起点として地域の将来像を設定する手法」を用いてきたが、これには観光等による交流人口を創出したり民間投資を呼び込んだりするような「人を惹きつける魅力」の議論よりも地域課題の議論が先行してしまう点に課題を有する。そのため、関与や投資をしたい人を惹きつけるような尖った夢のある将来像を描き、それをどう実現していくのか逆算して考える「バックキャスト型」の計画策定が求められている。その具体例として、持続可能な観光地域づくりの方法として提案されている「フロートビジョン」などがある(川原 2021)。筆者らは、東京都八王子市の中心市街地における景観形成及び市街地活性化に取り組むにあたり、こうした計画手法の適用を試みてきた。

そこで本稿では、このフロートビジョンの策定及びビジョンの実現に向けた取り組みが、公民連携による地域づくり事業の推進に対してどのような効果を発揮するかについて、アクションリサーチで試行した結果を報告し考察する。具体的には、ビジョンを行政計画に位置づけずともその実現に向けた取り組みを動かせるのかを、アクションを起こすことで検証した。

2 フロートビジョンのメソッドに基づく景観絵本の作成

2-1 フロートビジョン及びアクションのメソッド

前述の「バックキャスト型」の計画策定として、第一に、エリアの価値やポテンシャルをシーン(光景)として描くことを重視した。尖った提案やワクワクする提案を優先的・積極的に将来像として示すために、なぜやるか(WHY)、なにをやるか(WHAT)、どこでやるか(WHERE)の3点を描くこととした。

第二に、その実現に資するアクションを迅速に行政、市民、事業者、大学等で起こすことを目指した。近年注目を浴びているタクティカルアーバニズムのように、短期間かつ低コストなアクションからはじめ、段階的なプロセスを踏んでいくことが特徴である。

2-2 八王子市におけるフロートビジョン策定意図と経緯

研究対象地は、東京都八王子市の中心市街地である。絹産業を基盤に発展し、“桑都”と称された八王子。中心市街地には既に多様な活動があり活性化計画もある一方、エリアの将来像が官民で共有されていない状況にあった。また、行政の上位計画や分野別計画の将来目標を具体的な絵姿にしていないことも、将来像の共有を阻む一因と考えた。そこで、多様な景観施策に携わる景観行政の立場から、フロートビジョンの策定を通してこの課題に取り組むことになった。2020年度から、分野の専門家らによる景観デザイン会議、及び大学や地元関係者によるまちあるきやワークショップを複数回実施した。そこで寄せられた意見をもとに絵姿を描き、「八王子まちなか 景観みらいものがたり」(以下、景観絵本)と題したフロートビジョンを策定した(図1)。

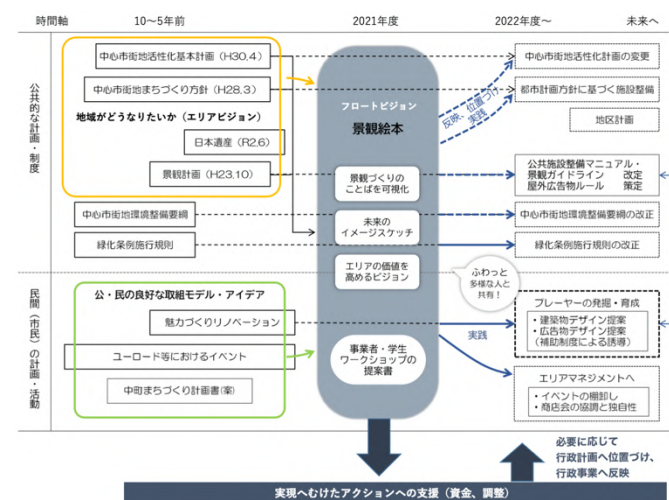


図1 行政・民間の各種計画と景観絵本の関係(市作成)

2-3 成果物としての景観絵本の特徴・工夫点

フロートビジョンで示した絵姿は、市民への伝わりやすさを重視し、まちを巡りながら魅力を発見していくストーリーの絵本形式でまとめることとした(図2)。

既存の行政計画の枠にとらわれないよう「30年後の将来像」を意識しながら議論を重ねることとなったが、結果的に議会や全庁的な理解を得ることができた。これにより、大学等の主体による「実現にむけたアクション」に対して関連部署からの応援が得られる状況が生まれた。

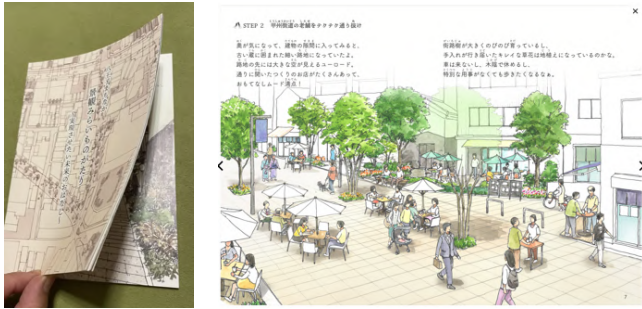


図 2 景観絵本（八王子中心市街地のフロートビジョン）

3 景観絵本のスケッチを起点としたアクションの事例

本章では、筆者らが「フロートビジョンの実現に資するアクション」を起こしていくために行なった試行と評価の流れを述べたあと、実際に企画・運営を行なった二つのアクションについて具体的に述べる。

3-1 アクションの試行と評価の流れ

第一に、景観絵本の策定に景観行政の立場から関与した八王子市まちなみ景観課（以下、まちなみ景観課）と筆者らが合同でまちあるき調査を実施した。景観絵本を手し、スケッチのモデルとなったエリアを歩き、各エリアの将来像と現状とのギャップを把握した。

第二に、前述のギャップを埋めるため、筆者らの問題意識と紐付けつつ「アシナミドリ」と「黒塀キャンパス」という2つのアクションを企画した。これらをまちなみ景観課に提案し、実現に向けたロードマップを整理した。

第三に、前述のロードマップをもとに関係者間での調整を行なった。まちなみ景観課から連携可能性のある主体を挙げてもらい、開催協力を得ることで企画の試行まで漕ぎ着けた。

第四に、実施した企画をランドスケープ分野の専門家に報告し、評価やアドバイスを依頼した。これをもとに、まちなみ景観課に対して次年度更なるアクションを起こしていくための提案を行なった。次節以降で、実際に企画・運営を行なった二つのアクションについて述べる。

3-2 アクション1「アシナミドリ」

このアクションは、JR 八王子駅から北西に伸びる「西放射線ユーロード（以下、ユーロード）」を対象に、このエリアにある3つの商店会が足並みを揃えて、街路樹や店先の足元に心地良い地植え植栽を増やしていくことを目的として行った。

① 課題や魅力の再確認と企画作成

初めに、景観絵本の6～7ページにある「網代茶屋」とその周辺を描いたスケッチに着目した（図2右図）。網代茶屋は、ユーロードに位置する複合施設である。

初回のまちあるき時点で、既にこの網代茶屋は一際目を引く存在であった。実際にランドスケープアーキテクトの監修のもと店先に美しい植栽が施されており、既存の好事例として位置付けられていた。

一方、ユーロードのこれ以外の場所に目を向けると、景観絵本のスケッチ中で街路樹の足元に植えられている

美しい植栽は現状植えられておらず、あろうことかその植栽マスへの違法駐輪やゴミ捨てが目立つ状況にあった。

こうした課題を踏まえ、植栽マスの裸地部分に美しい地植え植栽を施せば、景観絵本の実現に資するとともに駐輪・ゴミ問題の解決へと繋がるのではないかと考えた。こうして、周辺の地域住民をターゲットに「八王子まちなかの街路樹や店先のあしもとにみんなで足並みを揃えて心地良い地植え植栽を増やそう！」とする地植え植栽体験ワークショップ「アシナミドリ」を企画するに至った（図3左図）。その特徴は以下の通りである。

- 1) 八王子まちなかに点在する良質な緑を面的に拡大
- 2) 地域の関係者らに学生提案を行い足並みを揃える
- 3) 手入れが楽で美しい地植えの形で植栽をデザイン

② 企画の試行に向けた取り組み

この企画の実現に向け、まず当日植え付けを行う地植え植栽のデザインから着手した。まちなみ景観課に地元で活躍するランドスケープデザイナーT氏を紹介してもらったため、予め作成していた叩き台に専門家視点でのアドバイスをもらうことができた。

次に、当日の植え付け作業を手伝ってもらう造園業者を選定した。まちなみ景観課の職員にこれまで市の景観事業に積極的に携わってきた造園業者へ声をかけてもらい、景観絵本のスケッチ・植栽デザインを持参して協力を依頼したところ、スケッチへの共感を呼び協力を得ることができた。

さらに、今回の舞台であるユーロードに関係する3つの商店会へ実施協力を依頼した。まちなみ景観課に各商店会会長へアポを取ってもらい、景観絵本のスケッチ・植栽デザイン・当日のスケジュールを持参して協力を依頼したところ、視覚的に分かりやすいスケッチに好感を持ってもらい快諾を得ることができた。こうしてまちなみ景観課が、企画を担当した筆者らと地元関係者との仲を取り持ってくれたことで、スムーズに関係者からの協力を得て開催へと漕ぎ着けることができた。

当日は、15名の参加者が3～5名程度のグループに分かれて植栽マスへの植え付け作業を行い、街路樹の足元に



図 3 ワークショップで実際に行った植え付けの様子

景観絵本のスケッチに描かれているような植栽を施すことができた(図3右図)。

③ ワークショップ実施後の効果と地域住民からの評価

今回のワークショップで地植え植栽を施したことで、従前の駐輪・ゴミ問題の解決に寄与することができた。ユーロードに店舗を構える事業者や商店会メンバーから店先の景観向上に対する喜びの声も聞かれ、景観絵本やそれに伴う活動の周知機会にも繋がった。

一方、今回施した植栽を今後どのように維持・管理していくか明確に定まっていないという懸念点も指摘された。この点を共有したところ、連携可能性のある既存の市民団体を紹介されたり、関心を持ってくれた市民から声をかけてもらったりする場面があった。今後はそういった縁を大切にしつつ、植栽管理の担い手の組織化を積極的に企図していきたい。

3-3 アクション2「黒塀キャンパス」

このアクションは、八王子市にある多摩地域唯一の花街「中町地区」を対象に、地元まちづくり協議会の黒塀の景観づくり、すなわち、地区に残る黒塗り木塀の雰囲気地区全体に広げていく修景活動を、さらに面的かつ高質に発展させつつ、誘客を図っていくこと目的として行った。

① 課題や魅力の再確認と企画作成

初めに、景観絵本の10～11ページにある「桑都テラス」とその周辺を描いたスケッチに着目した(図4)。桑都テラスは、同地区に2022年11月に開設した商業施設である。



図4 景観絵本(黒塀キャンパス着目点)

初回のまちあるき時点で、シャッターへの黒色ペンキの塗装、フェンスの和風改修など、地元まちづくり協議会による黒塀の景観づくり活動が確認できた。一方、黒色ではないエアコン室外機やゴミ箱が目立っていたり、桑都テラスの壁面が本物の黒塀と質感が異なっていたりと、誘客に向けた改善の余地も確認できた。

そこで、この室外機やゴミ箱などの屋外設置物を、黒塀になじむ塗料を施した木質カバーで覆い、修景することで、景観絵本の絵姿に近づけるとともに、中町花街の更なる魅力向上につながるのではないかと考えた。さらに、その上で、誘客のためには、観光客が着物で歩き写

真を撮りたくなる空間を創出していく必要があり、それには地域の文化を象徴する和装飾の設置が効果的ではないかと考えた。こうして、中町地区の住宅や店舗の軒先を対象に「地元の方々が大切にしてきた黒塀を上質な『キャンパス』と見立て、八王子・花街文化を発信する場にしよう!」という目標を掲げ、それを学生主体のDIYでリノベーションを行うプロジェクト「黒塀キャンパス」を企画するに至った。その特徴は以下の通りである。

- 1) 黒塀という資源を活かしたさらなる景観向上の提案
- 2) 学生による誘客視点からの発想による修景装飾提案
- 3) 仮設修景アイテムの貸し出しによる修景の社会実験

② 企画の試行に向けた取り組み

企画の提案から合意に至るまでの経緯は次の通りである。まず、まちなみ景観課に企画の実施イメージを共有した上で、中町地区まちづくり協議会(以下、協議会)への提案を行ない実施協力を得た。次に、協議会の会長と、そのメンバーでもあるランドスケープアーキテクトI氏の協力のもと、現地調査及びヒアリングを実施し、中町の歴史や協議会の取り組みを把握しアドバイスももらった。その後、地区内の「一番通り」を重点地区に定め、その中から最初の実施場所を選定し、地権者の協力を得た。選定理由は、中町地区でも人通りが多く、前述の桑都テラスや花街の主要施設への動線の結節点であることから、景観向上の影響が大きいと判断したためである。

社会実験としての流れは次の通りである。まず、仮設修景アイテムを用いた学生提案を行い、数週間にわたって一時的な修景を実施した後、地権者等の意向や懸念点を議論する。以降は地権者の投資のもとで本設計及び修景整備を行い、これに市が助成をするという形をとった。

仮設修景アイテム(図5:a)は、誰でも気軽に真似できるように、敢えて既製品や市販の材料で準備した。また、誘客目的の装飾は、花街ならではのもてなし表現を示すことを考え、芸者手ぬぐいを飾ることとした。

整備当日は、I氏のサポートのもとで既存の植栽棚の撤去し、仮設修景アイテムの植栽棚及び屋外設置物カバーを組み立て、植栽や装飾を展示した(図5:b,c)。

③ アクション提案後の効果

今回の実験的修景の実施により、黒塀と統一感のある景観を一部分ながらも創出することが出来た。自宅の持ち主であるS氏や通行人からはこの変化に対する喜びの声が聞かれ、景観絵本やそれに伴う活動の周知機会にも繋がった。

なお、今回設置を行なったことで、悪天候時の倒壊の恐れやごみ収集のしづらさなどの課題が浮き彫りになった。これに対する対応をS氏と協議した上で決定し、今後の改修時の留意点を協議会に共有することができた。

これに加えて、協議会の発案により「劣化が目立つ壁面への塗料の再塗装」「案内看板の新規設置」などの施策が行われたことから、協議会内部の意識変化を誘発できたのではないかと考える。

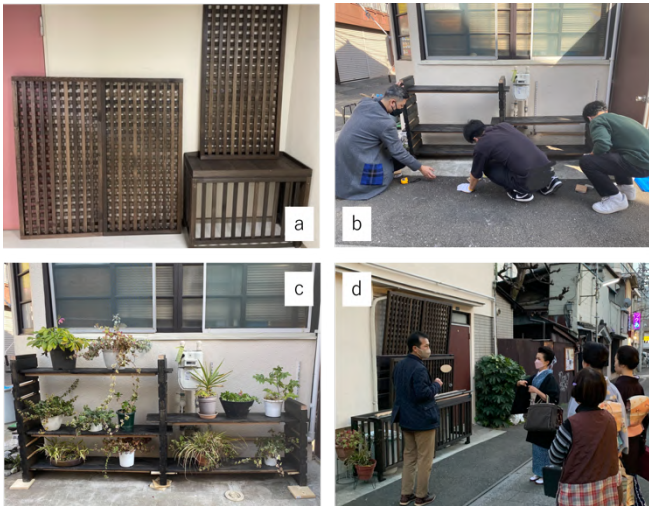


図 5 黒塚キャンパスの社会実験の様子

4 フロートビジョンに基づくアクションによる効果検証

前章で述べた「フロートビジョンの実現に資するアクション」の成果発表の機会として、まちなみ景観課の主催による「都市景観セミナー」を実施した。当日は、筆者ら教員・学生、行政職員と、緑を媒介に地域活動を起こしているランドスケープアーキテクト2名が登壇し、地域住民や周辺地域の行政職員など42名が聴講した。

本章では、同セミナーで行われた議論の議事録及び参加者アンケートを基に、今回のフロートビジョン及びアクションに対する簡易的な評価を行う。

4-1 フロートビジョンに対する評価

今回明らかになったフロートビジョン活用の利点を述べる。第一に、当該地域の官・民・地域間のビジョン共有の円滑化がある。「景観のイメージを可視化することで目指すものが固まっていくことが素晴らしく感じた(参加者)」「景観絵本を持っていくことで話を聞いてくれた方がたくさんいた(登壇者)」というように、分野の専門知識を有さずとも理解しやすい“スケッチ”という形で将来像を示すことで、興味・共感を得られたケースが数多く見られた。これはアクションの趣旨を説明し協力を仰ぐ際に有用であった。

第二に、景観行政の活動範囲の拡大及びその活動の周知がある。これまで景観行政の役割は、建設行為への確認をすることであると行政内外から思われてきた。しかし、「今後も市の人脈を活かして、何かをやりたい人と人とを繋げる役割を果たし、みんなが同じゴールを目指す状態を作っていきたい(まちなみ景観課)」というように、今回のフロートビジョン作成とその実現に向けたアクションを通して、具体的なエリアの将来像を示したり、意欲のある市民の窓口になったり、専門家を紹介して支援したりする場面での活躍が見られた。これにより、このような活躍が景観行政としてできることを、行政内外が認知することに繋がった。

4-2 アクションに対する評価

『人だけでなく緑も健康に』のフレーズに感化された(参加者)「緑が人と自然の関わりを作るという話にワクワクした(参加者)」というように、だれでも取り組みやすい緑化やDIY修景を入り口として地域活動に関心を持つ人を集めて地域を動かしたことで、地域内事業者の景観意識の向上を誘発できたことが評価されたと考える。

一方、「今回のアクションの続編を楽しみにしている(参加者)」「この取り組みをどうやって次に繋げていくのが大切になってくる(登壇者)」というように、今回のアクションを継続することへの期待と懸念が示された。

今回は30年後の将来像を示したが、このように実質目標年次を定めない示し方をすると、各主体が取り組みを自分事として捉えづらくなる可能性がある。フロートビジョンという行政計画に位置づけられていない将来ビジョンだからこそ、継続して興味を持ってもらえるよう、小さなアクションをセットで起こし続けていく必要があることがわかった。

4-3 今後の展望

今回、行政内の関連部署や地域の関係者に目指すイメージが共有され、尚且つ行政の後方支援の体制があることで、大学や民間主導であっても大半の事業が実現可能であることが示せた。今後は、実施したアクションの規模の拡大、及び企画運営・維持管理等の役割を担う市民団体の組織化を目指していくと同時に、今回取り上げることができなかったスケッチの実現に向けた新しいアクションの実施も検討していきたい。

※本論は科研費補助金「基盤研究(B) (17H00901)」を受けて行われた。

【注釈】

1) 黒塚キャンパスのアクションについては、参考文献1の「おしかけリノベーション」の方法や、参考文献2の「おてがるリノベーション」の方法を参考とした。

【参考文献】

1. 益尾 孝祐, 川原 晋, 泉 英明, 荒井 唯香, 長町 志穂, 片岸 将広, 木村 隼斗「長門湯本温泉における観光まちづくりと連携した景観ガイドラインの策定」建築デザイン (2018) 16-17, 2018-07-20 日本建築学会
2. 福永 裕美, 川原 晋, 益尾 孝祐「生活者によるDIY的景観向上を目指して-長門湯本温泉『おてがるリノベパンフレット』の手法-」農村計画学会誌 = Journal of rural planning / 農村計画学会 編 41 (1), 14-17, 2022-06
3. 川原晋(2021)「地域観光プランニングの視点とコロナ禍をふまえた持続可能な観光のリ・デザイン」, 日本建築学会大会, パネルディスカッション資料「ポストコロナに向けての観光地域の再生戦略」, 2021.09
4. 八王子市まちなみ整備部まちなみ景観課「景観絵本『八王子まちなみ景観みらいものがたり』」, 八王子市, 2023-03-10, <https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/006/001/004/p027594.html> (参照 2023-03-31)

* 東京都立大学 都市環境科学研究科 観光科学域 博士前期課程

** 東京都立大学 都市環境科学研究科 観光科学域 教授

***八王子市 主任 修士(工学)

* Master's programs, Dept of Tourism Science, Tokyo Metropolitan University

** Prof., Dept of Tourism Science, Tokyo Metropolitan University

*** Hachioji city, Chief, M.Eng.